

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2020

課題番号：16H02837

研究課題名（和文）なつかしさ感情の機能と個人差：認知・神経基盤の解明と応用

研究課題名（英文）Individual differences and functions of nostalgia: Cognitive-neural approach and their applications

研究代表者

楠見 孝（Kusumi, Takashi）

京都大学・教育学研究科・教授

研究者番号：70195444

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,660,000 円

研究成果の概要（和文）：なつかしさの機能と個人差に関して、その認知的・神経科学的基盤を解明し、回想法等への応用に役立てるために研究を進めた。

第1に、なつかしさの機能と個人差の認知的基盤を解明するための心理尺度と実験課題を開発し、16歳から90歳の市民に対する大規模調査と大学生への実験によって検討した。第2に、なつかしさの機能における個人差の神経基盤を同定するためのfMRI課題を作成し、大学生に実施した。第3に、髄液バイオマーカーで診断した軽症アルツハイマー病症例の臨床データを蓄積し、回想法の効果に影響する要因と神経基盤を解明した。第4に、日本の介入研究のメタ分析を行い、回想法の効果を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、第1に、なつかしさを支える記憶-感情過程の認知的、神経科学的基盤を検討した点である。第2に、なつかしさのもつポジティブな機能として、精神的健康や社会的絆などに及ぼす効果を明らかにした点である。第3に、なつかしさの傾向性や機能の個人差・年齢差・男女差を解明した点にある。第4に、なつかしさの個人差測定尺度、実験課題、fMRI課題などを作成した点である。本研究の社会的意義は、なつかしさを応用した対人援助技法である回想法について、その認知的、神経科学的基盤に基づく促進要因にかかわる考察を、調査・実験データ、臨床データ、先行研究のメタ分析に基づいて行った点である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to explore the cognitive and neuroscientific basis of the function of nostalgia as well as individual differences in order to apply the findings to reminiscence therapy. First, we developed psychological scales and experimental tasks to examine the cognitive basis of the function of nostalgia and individual differences; we then examined these factors through large-scale surveys of citizens between the age of 16 and 90 and experiments on university students. Second, we developed fMRI tasks and administered them to university students to identify the neural basis of individual differences in the function of nostalgia. Third, we accumulated clinical data on cases of mild Alzheimer's disease that were diagnosed with cerebrospinal fluid biomarkers to examine the factors and neural bases that influence the effects of reminiscence therapy. Fourth, we conducted a meta-analysis of intervention studies in Japan to examine the effects of reminiscence therapy.

研究分野：認知心理学

キーワード：記憶 感情 ノスタルジア エピソード記憶 自伝的記憶 単純接触効果 回想法 加齢

## 1 . 研究開始当初の背景

Nostalgia ( なつかしさ ) は , 17 世紀にホームシックなどに起因するネガティブ感情を中核とする症状の病名として造られた語である。その後は , ネガティブな感情に限らず過去の出来事の想起にともなう感情として位置づけられ , 人文学 , 社会学 , マーケティングなどの領域で研究が進められてきた。しかし , 認知心理学の記憶・感情研究における体系的研究はなかった。そうした中で , 2000 年代に入って , 英国の社会心理学者 Sedikides et al. (2004) のグループが , ノスタルジアの喚起刺激やポジティブな機能に注目して , 一連の研究を始めた。さらに , ノスタルジアの神経基盤についての研究が始まった ( e.g. , Barrett & Janata, 2016 ) 。

一方 , 国内においては , 2000 年代に入って , なつかしさの認知心理学的研究がはじまった ( たとえば , 楠見他 , 2009 ; Kusumi et al. , 2010 ; Sugimori et al. , 2011 ) 。そして , 日本心理学会における大会ワークショップ ( 楠見他 , 2008, 2009 ) , 公開シンポジウム「なつかしさの心理学 : 思い出と感情」 ( 楠見他 , 2011, 2012 ) が開催され , これらに基づいて本邦初のなつかしさに関する心理学書『なつかしさの心理学 : 思い出と感情』 ( 2014 ) が出版された。そこで , 楠見 ( 2014 ) は , なつかしさの生起には , 過去の単純接触効果と現在までの空白期間が必要だとするモデルを提起した。また , 楠見は前述の英国の研究グループと , 2012 年からなつかしさの文化差に関する国際共同研究を進めてきた ( Hepper , et al. , 2014 ) 。

これらの状況を踏まえて , 本研究課題では , ( 1 ) 日本において , なつかしさのポジティブおよびネガティブな機能にかかわる個人差を解明すること , およびその国際比較をおこなうこと , ( 2 ) これまで十分に解明されていなかった神経基盤を脳画像研究によって解明すること , ( 3 ) 回想法などの臨床場面におけるなつかしい記憶想起の効果の機序を解明することに取り組む。これらは , 心理学 , 認知神経科学 , 精神医学の領域において , 独立的に研究がされていた。そこで , 今回 , なつかしさに関する記憶と感情を軸に , 学問分野を越えた共同研究によって , なつかしさの個人差の認知・神経基盤を解明し , なつかしさを用いた回想法に効果的な要因を特定し , 認知症患者への応用に役立てることをめざした。

## 2 . 研究の目的

本研究の目的は , なつかしさのもつポジティブ・ネガティブな機能の個人差に関して , その記憶・感情過程の認知的 , 神経科学的基盤を解明することである。さらに , 軽度認知症の高齢者に対するなつかしさを用いた回想法に及ぼす効果的要素について検討することである。

3 つの研究課題とその目的は以下の通りである。

### ( 1 ) 課題 1 : なつかしさの機能と個人差の認知的基盤の検討

なつかしさの機能と個人差の認知基盤を解明するために , 個人差測定尺度 ( なつかしさ傾向など ) や課題 ( 記憶 , 会話 , 広告 , 物語理解課題など ) の開発を進め , それらを用いて , 大規模調査や実験を実施する。その具体的な目的は以下の 4 つである。

なつかしさの個人差測定のための尺度や課題の開発と測定

なつかしさの喚起刺激と機能にかかわる個人差を解明するための尺度を開発し , なつかしさとともなうポジティブ・ネガティブ傾向などがなつかしさの機能に及ぼす個人差 , 年齢差 , 男女差を , 幅広い年代の市民を対象とした大規模調査によって解明する。

なつかしさを支える単純接触効果

単純接触刺激によるなつかしさの喚起に , 参加者の楽観・悲観傾向と社会的勢力感が及ぼす影響を , 単純接触効果の実験デザインを用いて検討する。さらに , 勢力感の操作が , 広告のなつかしさをいし近未来的要素に及ぼす効果を検討する。

なつかしさを支える自伝的記憶

なつかしい記憶を語ることによる , 感情やその記憶への印象の変化について検討する。具体的には , 実験参加者が実験者に語った時の聞き手である実験者の反応の違いを操作し , 2 人のペアでの語り合いにおける自身や相手の過去に対する印象を検討する。

物語理解における時間となつかしさ

なつかしさ感情は , 自分が実体験あるいは仮想体験した場所の表象を , 過去の時間軸に統合し , 時空間フレームワークの中に自己を位置づけることで生起すると考えられる。そこで , なつかしさ感情生起の個人差と , 物語理解との関連を検討する。

### ( 2 ) 課題 2 : なつかしさの機能における個人差の神経基盤の検討

なつかしさ研究において , 神経科学的観点からは未だに十分な研究がなされているとは言い難い。そこで , なつかしさの機能や , なつかしさにおける個人差について , 新たな知見を得るために , 脳画像研究をおこなう。具体的には , なつかしさの機能と個人差の神経基盤を解明するために , 機能的磁気共鳴画像法 ( fMRI ) の実験課題を開発し , 若年健常者に対する fMRI 実験をおこなう。

### (3) 課題3：回想法の効果に影響する要因の検討

軽度認知症の高齢者に対して実施する回想法の効果に影響する要因を解明し、個人差に配慮した有効なアプローチを検討する。その具体的な目的は以下の2つである。

軽症アルツハイマー病患者における回想法の効果に影響する要因と神経基盤を解明する。

「高齢者に過去を想起して語るよう促す対人援助手段である回想法における療法効果を検討するため、日本でこれまでに取り組まれた介入研究のシステムティックレビューに取り組む。

## 3. 研究の方法

3つの課題の主な研究方法の具体的内容は下記の通りである。

### (1) 課題1：なつかしさの機能と個人差の認知的基盤の検討

なつかしさの個人差測定のための尺度や課題の開発と測定

なつかしさの喚起刺激と機能にかかわる個人差を解明するための尺度を開発し、なつかしさとともなうポジティブ-ネガティブ傾向などがなつかしさの機能に及ぼす個人差、年齢差、男女差を、10代-80代の市民を対象とした4回の大規模web調査を実施した。ここでは、英国、カナダ、米国の研究者と連携して、それぞれの国で開発された尺度の翻訳を行い、調査に用いて、国際比較をおこなった。

なつかしさを支える単純接触効果

実験1は、大学生参加者に対して、パワープライミング(社会的勢力に関する単語を事前に呈示するプライミング手法)ののちに、刺激(無意味図形)接触、1週間インターバル、刺激評定をおこなった。刺激接触は分散呈示ないし集中呈示で行い、実験1Aでは参加者を楽観-悲観傾向で、実験1Bでは社会的勢力感の高低で分割した。実験2では、家電や食品の広告をなつかしいないし近未来的な画像と対呈示して、その後に商品の好意度と購買意図の評定を求めた。実験2Aでは広告呈示前に、実験2Bでは呈示後にパワープライミング操作をおこなった。評定段階は、広告の商品に対する好意度と購買意図、再認判断を新旧の2件法で測定した。

なつかしさを支える自伝的記憶

実験3は、大学生参加者に、昔流行ったなつかしい音楽を聴いてもらいながら思い出した内容について実験者に語ってもらった。聞き手である実験者は「無反応」「共感」「非共感」のうちのいずれかで反応した。その後、思い出した記憶についての印象評定をおこなった。実験4は、大学生と高齢者参加者に対して、過去の記憶への印象がポジティブかネガティブかを測定し、ポジティブ同士のペアとポジティブ・ネガティブのペアを作った。そして、なつかしい過去の記憶を自由に語り合ってもらった後、会話や相手への印象評定をおこなった。

物語理解における時間となつかしさ

実験5では、様々な世代の実験参加者を対象として、web実験をおこなった。時空間情報を含んだ物語を題材として、時間の逆行あるいは順行が、時空間物語の理解に影響する可能性について検討した。具体的には、参加者は、2文目直後の時点で、文の実現可能性を判断させた。文の実現可能性とは、たとえば、2人の人物が同じ空間にいる場合は、物を渡すことが可能であるが、別の空間にいる場合は不可能となるという基準で判断をさせた。

### (2) 課題2：なつかしさの機能における個人差の神経基盤の検討

なつかしさ体験における神経基盤を調べるべく、健常若年者を対象として、機能的磁気共鳴画像法(fMRI)を用いて脳画像データを収集した。具体的にはなつかしさ体験を想起するような画像と、対照としてなつかしさ体験を喚起しないような画像を見る課題を作成して、なつかしさ体験に特異的な脳活動の同定を試みた。また、なつかしさの個人差を検討するために、単純に快や不快が惹起される画像を見る課題もおこなった。

### (3) 課題3：回想法の効果に影響する要因の検討

髄液バイオマーカーや神経心理検査、脳画像検査などを含む臨床データを蓄積し、データベースを構築した。

回想法またはライフレビューの有効性が統制群を設けた実験デザインに基づき検討されていることなどの適格性基準を設け、CiNii Articlesおよび医中誌webを用いて文献を検索し、条件に合致する29件の文献をレビュー対象とした。さらに使用された主な効果評価指標についてメタ分析をおこなった。

## 4. 研究成果

### (1) 課題1：なつかしさの機能と個人差の認知的基盤の検討

なつかしさの個人差測定のための尺度や課題の開発と測定

(a) 調査1は、10代から80代の市民900人に対する調査の結果、加齢によって、なつかしさ喚起のしやすさと、ポジティブななつかしさ傾向、ポジティブな機能である社会的サポート感、人生満足度、自尊心が上昇し、孤独感は低下することが明らかになった。

(b) 調査2は、20代から80代の市民1001人に対する調査の結果、加齢によって、ポジティブ

ブななつかしき傾向と、時間的展望の[過去肯定]が上昇し、一方、ネガティブななつかしき傾向と[過去否定]が低下した。

(c) 調査 3 は、10 代から 70 代の市民 1020 人に対する調査の結果、なつかしきの機能（社会的つながり、時間的連続性、人生の意味、自己の明確性）が、加齢により上昇し、なつかしきポジティブ傾向、時間的展望、生活満足度と正相関することを明らかにした。

(d) 調査 4 では、10 代から 90 代の市民 1497 人に対する調査において、なつかしきの特性・状態、自伝的-文化的側面の測定尺度を開発し、なつかしきの機能や加齢との関連を検討した。

(e) 市民の 3 時点パネルデータを用いて、なつかしきのポジティブ傾向とネガティブ傾向が、次時点の人生満足度をそれぞれ上昇、下降させることを明らかにした。また、人生満足度は次時点のなつかしきのネガティブ傾向を低下させた。

#### なつかしきを支える単純接触効果

(a) 実験 1A では、促進的な認知状態の楽観主義者において、集中呈示による単純接触の遅延後の上昇を検出することができた。実験 1B では、予防焦点を高められた参加者に対しては、なつかしき感情が孤独感の低減と社会的サポート感の上昇をもたらした。集中呈示による単純接触効果を上昇させた。

(b) 実験 2A では、促進的認知が近未来画像と、防衛的認知がなつかしい画像と対呈示された家電広告の効果を高めた。広告接触後にパワー操作をおこなった実験 2B では実験 2A のような結果は得られなかった。

#### なつかしきを支える自伝的記憶

(a) 実験 3 では、第 1 に、共感的な反応を示された際に話した内容への印象がよりポジティブになること、第 2 に、なつかしき傾向が高い人のほうがその傾向が強くなることが明らかになった。

(b) 実験 4 では、第 1 に、過去に対してポジティブ・ネガティブペアのネガティブな人は、会話を「簡単ではない」と感じる傾向が高いこと、第 2 に、ポジティブ・ネガティブペアのポジティブな人は、パートナーに対して、よりネガティブな印象を抱くことが明らかになった。

#### 物語理解における時間となつかしき

実験 5A では、第 1 に、昔をなつかしむ傾向が高いほど、物語理解における時空間課題の成績が高まる可能性が示唆された。第 2 に、アレキシサイミア傾向の高い、感情を伝えるのが難しい人ほど時間と空間情報を操作した物語の正答率が高かった。このことから、感情を伝えるのが難しい人は、内的な手がかり（登場人物の心情）よりも、外的な手がかり（時間と空間情報）に注目することが明らかになった。実験 5B では、なつかしき傾向の高さとアレキシサイミア傾向の高さが、物語理解における時空間課題の成績を向上させることが明らかになった。実験 5C では、なつかしき傾向の高い人ほど、物語理解の時空間課題成績が高く、メンタルタイムトラベルが得意であった。また、自伝的記憶想起ができるほど、時空間情報を含んだ物語理解の成績が高かった。

### (2) 課題 2：なつかしきの機能における個人差の神経基盤の検討

健常若年者を対象とした機能的磁気共鳴画像法 (fMRI) による脳画像データを分析した結果、左の腹内側前頭前野や後帯状皮質の一部の領域の脳活動に、なつかしきとの関連を認めた。また快や不快感情を惹起された時の脳活動によって、なつかしきの脳活動がどの程度近似できるのかを調べた。その結果、心理指標である NEO-PI-R の神経症傾向の得点が高い程、不快感情を惹起された時の脳活動によって近似できる割合が大きいという正の相関が認められた。

### (3) 課題 3：回想法の効果に影響する要因の検討

軽症アルツハイマー病患者における回想法の効果に影響する要因と神経基盤を解明するため、髄液バイオマーカーや神経心理検査、脳画像検査などを含む臨床データを蓄積、データベースを構築した。

回想法またはライフレビューの有効性に関して、メタ分析をおこなった結果、認知症高齢者に対する研究ではグループ回想法による認知機能とひきこもりへのやや小さな効果が認められた。上記の試みとともに回想となつかしきの感情との関連を検討し、ライフレビューにおける統合のプロセスとなつかしき感情との類似性が推察された。

### (4) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究の成果は、国内外において、下記の位置づけができる。

第 1 に、なつかしきを支える記憶-感情過程の認知的、神経科学的基盤を検討した点である。これまでなつかしき (nostalgia) 研究は、社会心理学的研究が多かったため、本研究で進められた記憶と感情に焦点を当てた認知的、神経科学的な実証研究は、新たなアプローチによる成果であると考えられる。

第 2 に、なつかしきのもつ機能として、精神的健康や社会的絆などに及ぼすポジティブな効果を明らかにした点である。

第 3 に、なつかしきの傾向性や機能にかかわる個人差・年齢差・男女差を解明した点である。

第 4 に、なつかしきの心理学研究を、回想法による高齢者支援などに応用するために、その認知的・神経科学的な場合の基盤を検討するとともに、過去の介入研究を検討するメタ分析をおこ

なった点である。

本研究の成果は、以下のような国内外におけるインパクトをもつと考える。

第 1 に、なつかしさの認知的、神経科学的アプローチによる多角的な実証的データに基づいて、理論的な考察をおこなった点である。2021 年には、これらの本研究の成果に基づく論文を集めた『心理学評論』の特集号「なつかしさの認知・神経基盤と機能」(64 巻 1 号)を刊行して、心理学とその関連分野における幅広い読者に向けて発信をおこなった。

また、本研究の一部として、王・楠見(2018)は日本心理学会第 82 回学術大会優秀発表賞、松田他(2019)は日本認知心理学会 第 17 回大会優秀発表賞(新規性評価部門)、楠見(2021)は日本認知心理学会 第 18 回大会優秀発表賞(社会的貢献度評価部門)を受賞した。

第 2 は、なつかしさの傾向性、機能などを測定するために個人差測定尺度を新たに開発した点、海外の心理尺度の日本語版を開発した点である。また、なつかしさと単純接触効果、自伝的記憶、物語理解にかかわる実験課題、fMRI 課題などを作成した点である。個人差測定尺度の一部は、前述の『心理学評論』特集号に掲載するとともに、web ページに、研究のリソースとして、資料公開している(<https://researchmap.jp/read0066314/>)。

第 3 は、なつかしさを応用した対人援助技法である回想法について、その認知的、神経科学的基盤に基づく促進要因にかかわる考察を、調査・実験データ、臨床データ、先行研究のメタ分析に基づいておこなった点である。

今後の展望としては、以下の 3 つを挙げる。

第 1 は、国際的な共同研究である。本研究では、英国、カナダなどの研究者と連携して、心理尺度の日本語版を用いて、調査・実験を実施した。さらに、欧米だけでなく、他の地域の研究者と共同して、なつかしさの認知的・神経科学的基盤の文化的普遍的な面を解明するとともに、文化的差異がどのように生じるかを検討する。

第 2 は、第 1 の成果を踏まえて、なつかしさの認知的、神経科学的、社会的なアプローチによる研究を統合し、体系的な理論化をおこなうことである。

第 3 は、実践的な応用研究として、回想法の実践場面において、本研究で開発した心理尺度や実験課題、fMRI 課題を用いて、効果測定をおこなうことである。

#### 主な文献

- Barrett, F.S., & Janata, P. (2016). Neural responses to nostalgia-evoking music modeled by elements of dynamic musical structure and individual differences in affective traits. *Neuropsychologia*, *91*, 234-246.
- Hepper, E. G., Wildschut, T., Sedikides, C., Ritchie, T. D., Yung, Y. F., Hansen, N., Kusumi, T., ..., Zhou, X. (2014). Pancultural nostalgia: Prototypical conceptions across cultures. *Emotion*, *14*, 733-747.
- 楠見 孝 (編) (2014). なつかしさの心理学：思い出と感情 誠信書房
- 楠見 孝 (企画)・牧野圭子・川口 潤・仲真紀子 (2011, 2012). なつかしさの心理学：思い出と感情 日本心理学会公開シンポジウム 京都, 名古屋
- Kusumi, T., Matsuda, K., Sugimori, E. (2010). The effects of aging on nostalgia in consumers' advertisement processing. *Japanese Psychological Research*, *52*, 150-162.
- 楠見 孝・水越 康介・瀧川 真也・川口 潤 (2009). ノスタルジア研究の現在：基礎的側面と応用的アプローチ(ワークショップ) 日本心理学会第 73 回大会発表論文集, WS(24).
- 楠見 孝・杉森 絵里子・松田 憲・瀧川真也・川口潤(指定討論) (2008). ノスタルジア：記憶と感情, 消費者行動の接点(ワークショップ) 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, WS(53).
- Sedikides, C., Wildschut, T., & Baden, D. (2004). Nostalgia: Conceptual issues and existential functions. In J. Greenberg, S. Koole, & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of experimental existential psychology* (pp. 200-214). New York, NY: Guilford Press.
- Sugimori, E., Matsuda, K., & Kusumi, T. (2011). The contradictory effects of nostalgic advertisements on nostalgia for products and on remembering advertisements. *Japanese Psychological Research*, *53*, 42-52.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計32件（うち査読付論文 28件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 23件）

1. 著者名 楠見 孝	4. 巻 64
2. 論文標題 なつかしさの認知-感情的基盤と機能：個人差と年齢変化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松田 憲	4. 巻 64
2. 論文標題 単純接触効果となつかしさ感情	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 杉森絵里子	4. 巻 64
2. 論文標題 なつかしさの観点から論じる自伝的記憶研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 米田英嗣・西田マリア	4. 巻 64
2. 論文標題 物語理解における時空間となつかしさ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村井俊哉	4. 巻 64
2. 論文標題 「なつかしさ」研究の広がり - 米田・西田論文へのコメント -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堀 朝樹・高橋英彦	4. 巻 64
2. 論文標題 なつかしさの神経基盤	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野村信威	4. 巻 64
2. 論文標題 高齢者における回想法のエビデンスとその限界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kersten, M., Swets, J. A., Cox, C. R., Kusumi, T., Nishihata, K., & Watanabe, T.	4. 巻 11
2. 論文標題 Attenuating pain with the past: Nostalgia reduces physical pain	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 2722
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2020.572881	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 小谷 恵・楠見 孝	4. 巻 33
2. 論文標題 飲料によるなつかしさの喚起が感情と社会的サポート感に及ぼす効果	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Health Psychology Research	6. 最初と最後の頁 163-171
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2020.572881	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sugimori, E, Shimokawa, K, Aoyama, Y, Kita, T, Kusumi, T	4. 巻 6(8)
2. 論文標題 Empathetic listening boosts nostalgia levels and positive emotions in autobiographical narrators .	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Heliyon	6. 最初と最後の頁 e04536
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.heliyon.2020.e04536	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miyamoto Masakazu, Kuzuya Akira, Noda Yasuha, Ueda Sakiho, Asada-Utsugi Megumi, Ito Shinji, Fukusumi Yoshiyasu, Kawachi Hiroshi, Takahashi Ryosuke, Kinoshita Ayae	4. 巻 75
2. 論文標題 Synaptic Vesicle Protein 2B Negatively Regulates the Amyloidogenic Processing of A $\beta$ as a Novel Interaction Partner of BACE1	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Alzheimer's Disease	6. 最初と最後の頁 173-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3233/JAD-200071	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Okano Takayuki, Yamamoto Yosuke, Kuzuya Akira, Egawa Naohiro, Kawakami Koji, Furuta Ichiro, Mizuno Kayoko, Fujino Kiyohiro, Kojima Ken, Omori Koichi	4. 巻 73
2. 論文標題 Development of the Reading Cognitive Test Kyoto (ReaCT Kyoto) for Early Detection of Cognitive Decline in Patients with Hearing Loss	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Alzheimer's Disease	6. 最初と最後の頁 981-990
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3233/JAD-190982	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 Shimokawa Kazuma, Sugimori Eriko	4. 巻 126
2. 論文標題 Using Virtual Reality to Study Subjective Time in Crowded Versus Uncrowded Environments	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Perceptual and Motor Skills	6. 最初と最後の頁 737 ~ 752
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0031512519857869	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Liang Yu, Shimokawa Kazuma, Yoshida Shigeo, Sugimori Eriko	4. 巻 10
2. 論文標題 What "Tears" Remind Us of: An Investigation of Embodied Cognition and Schizotypal Personality Trait Using Pencil and Teardrop Glasses	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 2826
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2019.02826	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Komeda Hidetsugu, Kosaka Hirota, Fujioka Toru, Jung Minyoung, Okazawa Hidehiko	4. 巻 10
2. 論文標題 Do individuals with autism spectrum disorders help other people with autism spectrum disorders?: An investigation of empathy and helping behaviors in adults with ASD.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychiatry	6. 最初と最後の頁 376
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2019.00376	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 米田 英嗣・問野 陽子・板倉 昭二	4. 巻 62
2. 論文標題 こころの多様な現象としての共感性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 39 ~ 50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24602/sjpr.62.1_39	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米田英嗣・安達真理子・大塚 類	4. 巻 11
2. 論文標題 国語科における鑑賞教育の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 青山学院大学 教育人間科学部紀要	6. 最初と最後の頁 147 ~ 156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takechi Hajime, Kokuryu Atsuko, Kuzuya Akira, Matsunaga Shinji	4. 巻 19
2. 論文標題 Increase in direct social care costs of Alzheimer's disease in Japan depending on dementia severity	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Geriatrics & Gerontology International	6. 最初と最後の頁 1023 ~ 1029
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ggi.13764	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Jingami Naoto, Uemura Kengo, Asada-Utsugi Megumi, Kuzuya Akira, Yamada Shigeki, Ishikawa Masatsune, Kawahara Takashi, Iwasaki Takuya, Atsuchi Masamichi, Takahashi Ryosuke, Kinoshita Ayae	4. 巻 72
2. 論文標題 Two-Point Dynamic Observation of Alzheimer 's Disease Cerebrospinal Fluid Biomarkers in Idiopathic Normal Pressure Hydrocephalus	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Alzheimer's Disease	6. 最初と最後の頁 271 ~ 277
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3233/JAD-190775	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iidaka Tetsuya, Kogata Tomohiro, Mano Yoko, Komeda Hidetsugu	4. 巻 10
2. 論文標題 Thalamocortical Hyperconnectivity and Amygdala-Cortical Hypoconnectivity in Male Patients With Autism Spectrum Disorder	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychiatry	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsy.2019.00252	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Komeda Hidetsugu, Eguchi Yoko, Kusumi Takashi, Kato Yuka, Narumoto Jin, Mimura Masaru	4. 巻 9
2. 論文標題 Decision-Making Based on Social Conventional Rules by Elderly People	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2018.01412	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Komeda Hidetsugu, Taira Tomohiro, Tsunemi Kohei, Kusumi Takashi, Rapp David N.	4. 巻 7
2. 論文標題 A sixth sense: Narrative experiences of stories with twist endings	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Scientific Study of Literature	6. 最初と最後の頁 203-231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/ssol.17002.kom	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kyosuke Hiyama, Hirosugu Okada, & Ken Matsuda	4. 巻 41
2. 論文標題 Understanding the effect of background awareness in urban wind environment visualizations to minimize information entropy	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Sustainable Cities and Society	6. 最初と最後の頁 242-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.j.scs.2018.05.036	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梶見 孝・米田英嗣	4. 巻 5
2. 論文標題 “ 聖地巡礼 ” 行動と作品への没入感 : アニメ、ドラマ、映画、小説の比較調査	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 コンテンツツーリズム学会論文集	6. 最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 米田英嗣	4. 巻 4
2. 論文標題 中学校・高等学校における新たな教育方法の実践的試み - 授業における物語の読み返しの検討をとおして -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 青山学院大学教職研究	6. 最初と最後の頁 137-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 興相盛剛・松田 憲・楠見 孝	4. 巻 17(1)
2. 論文標題 物体運動の運動要因が対象への情動認知に及ぼす影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本感性工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5057/jjske.TJSKE-D-17-00050	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Wang Xueying, Kastanenka Ksenia V., Arbel-Ornath Michal, Commins Caitlin, Kuzuya Akira, Lariviere Amanda J., Krafft Grant A., Hefti Franz, Jerecic Jasna, Bacskai Brian J.	4. 巻 8
2. 論文標題 An acute functional screen identifies an effective antibody targeting amyloid- oligomers based on calcium imaging	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Scientific Reports	6. 最初と最後の頁 4634
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41598-018-22979-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 小山内秀和・楠見 孝	4. 巻 25
2. 論文標題 物語への移入尺度日本語版の作成と信頼性および妥当性の検討	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 パーソナリティ研究	6. 最初と最後の頁 50-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2132/personality.25.50	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡田博嗣・樋山恭助・松田 憲・小金井真	4. 巻 41(2)
2. 論文標題 都市建築環境の可視化情報におけるエントロピー最小化に関する研究：CFD解析結果の表示形式が都市風環境の直感的理解に及ぼす影響の分析	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本風工学会論文集	6. 最初と最後の頁 68-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5359/jwe.41.68	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 興相盛剛・松田 憲・楠見 孝	4. 巻 16(1)
2. 論文標題 物体運動における接近回避行動が対象への生物性認知と好ましさに与える影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本感性工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 137-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5057/jjske.TJSKE-D-16-00061	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Pornpattananangkul., N., Hariri, A.R., Harada, T., Mano, Y., Komeda, H., Parrish, T.B., Sadato, N., Iidaka, T., & Chiao, J.Y.	4. 巻 139
2. 論文標題 Cultural influences on neural basis of inhibitory control.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 NeuroImage	6. 最初と最後の頁 114-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.neuroimage.2016.05.061	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Komeda, H., Osanai, H., Yanaoka, K., Okamoto, Y., Fujioka, T., Arai, S., Inohara, K., Koyasu, M., Kusumi, T., Takiguchi, S., Kawatani, M., Kumazaki, H., Hiratani, M., Tomoda, A., & Kosaka, H.	4. 巻 6
2. 論文標題 Decision making processes based on social conventional rules in early adolescents with and without autism spectrum disorders.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Scientific Reports	6. 最初と最後の頁 37875
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/srep37875	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計52件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 楠見 孝
2. 発表標題 なつかしき傾向性と加齢がなつかしさの機能に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松田憲・楠見孝・藤野実由・橋口綾乃
2. 発表標題 刺激への新奇性付加が単純接触効果に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第18回大会 ベーシック&フロンティアセミナー（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉森絵里子・楠見孝
2. 発表標題 懐かしい自伝的記憶の共有が会話や相手の印象に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田寛香・楠見孝
2. 発表標題 自伝的エピソードが懐かしさ体験に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 葛谷 聡
2. 発表標題 髄液バイオマーカー診断された軽症アルツハイマー病患者における漢字能力の臨床的意義
3. 学会等名 第61回日本神経学会学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 葛谷 聡
2. 発表標題 髄液バイオマーカーを用いた軽症アルツハイマー病における漢字想起障害の臨床的意義
3. 学会等名 第39回日本認知症学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 楠見 孝
2. 発表標題 日常生活におけるデジャビュとジャメビュ : 類似性に基づく経験想起との関連性
3. 学会等名 日本認知心理学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 楠見 孝・西川 一二・野村 信威・Webster Jeffrey Dean
2. 発表標題 時間的展望が叡智と生活満足度に及ぼす効果 : 日本版時間的展望バランス尺度(BTPS-J)の開発に基づく検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田 寛香・楠見 孝
2. 発表標題 懐かしさの特性と発生機序の検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高城雅裕・杉森絵里子
2. 発表標題 メタ記憶における内的表象抑制の影響
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松田 憲・橋口綾乃・藤野実由・楠見 孝
2. 発表標題 刺激への新奇性付加が単純接触効果に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 熊谷 洋・森本泰宏・顧 是凡・松田 憲・有賀敦紀
2. 発表標題 商品選択のオーバーロード現象に関与する因子に関する実験的研究
3. 学会等名 日本認知科学会第36回大会
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 松田 憲・杉森絵里子・楠見 孝
2. 発表標題 社会的勢力感が単純接触効果に及ぼす影響：刺激の分散 集中呈示に基づく検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 米田 英嗣
2. 発表標題 定型発達および自閉スペクトラム児を対象にした道徳教育のための実験的検討 公募シンポジウム「道徳教育における教育心理学の貢献」
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 葛谷聡
2. 発表標題 認知予備能が髄液アルツハイマー病バイオマーカーと認知機能におよぼす影響の検討
3. 学会等名 第60回日本神経学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 葛谷聡
2. 発表標題 髄液バイオマーカー診断された軽症アルツハイマー病における漢字書字能力と認知機能の検討
3. 学会等名 第38回日本認知症学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 王 隆基・楠見 孝
2. 発表標題 広告画像と商品の覚醒度の一致が購買意図に及ぼす影響～畏怖と懐かしさ画像に基づく検討～
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 楠見 孝
2. 発表標題 なつかしい記憶と他者との絆
3. 学会等名 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 第85回（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉森 絵里子・松田 憲・楠見 孝
2. 発表標題 自伝的記憶語り時の聞き手の態度がなつかしさに及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第16回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米田英嗣
2. 発表標題 道徳性の多面的検討
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米田英嗣
2. 発表標題 自閉スペクトラム症の人たち同士の小集団の可能性と課題
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米田 英嗣, 市村 賢士郎, 西山 慧, 西口 美穂, 渡邊 智也
2. 発表標題 文学読解は社会的能力を高めるか?
3. 学会等名 人工知能学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤貞之・今井優介・工藤傑・長戸操・松田 憲・有賀敦紀
2. 発表標題 選択のオーバーロード現象が商品購買意図に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知科学会第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松田 憲・小野史典・杉森絵里子・楠見 孝
2. 発表標題 商品評価時のパワー操作が広告効果に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第16回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松田 憲・興相盛剛・楠見 孝
2. 発表標題 集中呈示による長期的単純接触効果に楽観 - 悲観傾向と勢力感が及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 楠見 孝
2. 発表標題 加齢によるポジティブな時間的展望となつかしさの増大
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 楠見 孝・米田 英嗣
2. 発表標題 作品舞台の旅“ 聖地巡礼 ”における没入感
3. 学会等名 日本認知心理学会第15回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 楠見 孝・米田 英嗣
2. 発表標題 “ 聖地巡礼 ” 行動と作品への没入感：アニメ、ドラマ、映画、小説の比較調査
3. 学会等名 コンテンツツーリズム学会第5回論文発表大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Liang Y. & Sugimori E.
2. 発表標題 The effect of embodied cognition on memories
3. 学会等名 The 15th Conference of the Japanese Society for Cognitive Psychology
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松田 憲・内田岳人・興相盛剛・楠見 孝
2. 発表標題 刺激の色によるパワー操作が単純接触効果に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河端健司・武田諭志・川原大幸・松田 憲
2. 発表標題 現状維持バイアスに年齢・情動・ストレスが及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知科学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松田 憲・檀 友香莉・三石奈々・三浦佳世・楠見 孝
2. 発表標題 鏡像への単純接触効果が潜在的自尊心に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Matsuda, K., Mitsuishi, N., Miura, K., & Kusumi, T.
2. 発表標題 The effects of mere exposure of the mirror image on implicit self-esteem
3. 学会等名 The 58th Annual Meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kumamaru, M., Osa, A., & Matsuda, K.
2. 発表標題 Tactile sensation induced by images of clothes with motion parallax
3. 学会等名 Kansei Engineering & Emotion Research Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米田 英嗣・ヒル エリザベス
2. 発表標題 運動能力と共感性が時間産出に及ぼす効果 発達性協調運動障害の成人を対象にした検討
3. 学会等名 日本認知心理学会第15回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Komeda, H., Kosaka, H., & Okazawa, H.
2. 発表標題 Empathy and helping behaviors in narrative comprehension: Comparison between adults with autism spectrum disorder and typically developing adults
3. 学会等名 27th Annual Meeting of the Society for Text and Discourse (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米田 英嗣・小坂 浩隆・岡沢 秀彦
2. 発表標題 自閉スペクトラム症の成人における心情理解と援助動機
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Masakazu Miyamoto, Yasuha Noda, Akira Kuzuya, Kengo Uemura, Megumi Asada-Utsugi, Shinji Ito, Yoshiyasu Fukusumi, Hiroshi Kawachi, Ryosuke Takahashi, Ayae Kinoshita
2. 発表標題 SV2B can regulate BACE1 localization in the hippocampus
3. 学会等名 World Congress of Neurology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kawaguchi, K., Kotani, M., & Kusumi, T.
2. 発表標題 The effects of nostalgia on mood and perceived social support while drinking "CALPIS"
3. 学会等名 The 31st International Congress for Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 楠見孝
2. 発表標題 ポジティブな懐かしさ感情の加齢による増大 社会情動的選択性理論に基づく検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第57回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 楠見孝
2. 発表標題 懐かしさ感情のポジティブ効果の加齢による増大：社会情動的選択性理論に基づく検討
3. 学会等名 日本認知心理学会高齢者心理学部会第14回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 楠見孝・米田英嗣
2. 発表標題 作品舞台の旅“聖地巡礼”における没入感
3. 学会等名 日本認知心理学会第15回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 興相盛剛・松田 憲・中元俊介・小島隆次・長 篤志・楠見 孝
2. 発表標題 刺激への視線移動距離が選好判断に与える影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第14回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 松田 憲・興相盛剛・小野史典・杉森絵里子・楠見 孝
2. 発表標題 パワーライミングが広告効果に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第14回大会
4. 発表年 2016年



1. 発表者名 Matsuda, K., Onoda, S., Kouroki, M., & Kusumi, T.
2. 発表標題 The effects of power priming and exposure sequence on mere exposure effect
3. 学会等名 The 31st International Congress for Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 松田 憲・黒田怜佑・楠見 孝・辻 正二
2. 発表標題 時鐘施設の音環境が時間共有感と街への帰属意識に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知科学会第33回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Komeda, H., Mano, Y., Matsuda, Y., Osanai, H., Kawasaki, M., Kusumi, T., Aso, T., & Funabiki, Y.
2. 発表標題 Temporal and spatial perspective taking with autism spectrum disorders.
3. 学会等名 "Neurodevelopmental Disorders Annual Seminar 2016" (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 江口洋子・米田英嗣・加藤佑佳・成本 迅・三村 將
2. 発表標題 善悪判断課題における加齢の影響
3. 学会等名 第31回日本老年精神医学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Komeda, H.
2. 発表標題 Empathy and perspective taking in autism spectrum disorders.
3. 学会等名 The 31st International Congress for Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Komeda, H.
2. 発表標題 自閉スペクトラム症における共感および善悪判断
3. 学会等名 東北大学加齢医学研究所 加齢研セミナー (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 米田英嗣・間野陽子・松田佳尚・小山内秀和・川崎真弘・楠見 孝・麻生俊彦・船曳康子
2. 発表標題 物語における時空間情報に基づく視点取得の神経基盤
3. 学会等名 日本ヒト脳機能マッピング学会第19回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米田 英嗣・ヒル エリザベス
2. 発表標題 運動能力と共感性が時間産出に及ぼす効果
3. 学会等名 日本認知心理学会第15回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 楠見孝	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 未定
3. 書名 なつかしさはなぜ起こるか：単純接触効果と自伝的記憶，デジャビュ 繁榎算男（編）心理学理論の楽しみと使い方／理論バトル	

1. 著者名 松田 憲	4. 発行年 2020年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 182
3. 書名 広告効果を上げる認知心理学 米田英嗣・和田裕一（編）消費者の心理をさぐる：人間の認知から考えるマーケティング	

1. 著者名 米田英嗣・間野陽子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 264
3. 書名 物語理解と感情 日本児童研究所（編） 児童心理学の進歩 2021年版	

1. 著者名 米田英嗣・津村将章	4. 発行年 2020年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 182
3. 書名 物語を用いた消費者行動 ナラティブ・プロジェクションに基づく検討 米田英嗣・和田裕一（編）消費者の心理をさぐる 人間の認知から考えるマーケティング	

1. 著者名 松田 憲	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 見れば見るほど好きになる：単純接触効果 三浦佳世・河原純一郎（編）美しさと魅力の心理	

1. 著者名 松田 憲	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 あの時見たものは今見ても：感情（気分）一致効果 三浦佳世・河原純一郎（編）美しさと魅力の心理	

1. 著者名 米田英嗣	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 128
3. 書名 自閉スペクトラム症者同士の共感性：自閉スペクトラム症者による物語理解に基づく検討 藤野 博（編）『コミュニケーション発達の理論と支援』（シリーズ「支援のための発達心理学」）	

1. 著者名 米田英嗣	4. 発行年 2017年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 288
3. 書名 物語理解における時間情報および自己表象 信原幸弘（編）時間・自己・物語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

なつかしさ感情の機能と個人差：認知・神経基盤の解明と応用  
<http://cogpsy.educ.kyoto-u.ac.jp/personal/Kusumi/nostalgia.htm>  
 梶見 孝 資料公開（講演資料・心理尺度・実験材料）  
<https://researchmap.jp/read0066314/>  
 梶見 孝（2020）. なつかしさの心理学 - こころの時間旅行 - 京都大学春秋講義  
<https://www.youtube.com/watch?v=UzZ8v1Vu6e4>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松田 憲  (Matsuda Ken)  (10422916)	北九州市立大学・大学院マネジメント研究科・教授    (27101)	
研究分担者	杉森 絵里子  (Sugimori Eriko)  (70709584)	早稲田大学・人間科学学術院・准教授    (32689)	
研究分担者	高橋 英彦  (Takahashi Hidehiko)  (60415429)	東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・教授    (12602)	
研究分担者	米田 英嗣  (Komeda Hidetsugu)  (50711595)	青山学院大学・教育人間科学部・准教授    (32601)	
研究分担者	葛谷 聡  (Kuzuya Akira)  (30422950)	京都大学・医学研究科・准教授    (14301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野村 信威  (Nomura Nobutake)  (90411719)	明治学院大学・心理学部・准教授    (32683)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	堀 朝樹  (Hori Tomoki)	京都大学・教育学研究科・大学院生   (14301)	
研究協力者	池田 寛香  (Ikeda Hiroka)	京都大学・医学研究科・大学院生   (14301)	
連携研究者	村井 俊哉  (Murai Toshiya)  (30335286)	京都大学・医学研究科・教授   (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
カナダ	Langara College			
イギリス	Goldsmiths, University of London	University of Surrey		